




Yukitoshi
PORTFORUO



はじめに

刺激と満足感を提供できるような、ラノベ作家になりたい

私はライトノベルを通して、一喜一憂を噛み締めてきました。

コミカルなキャラクター同士のやり取りに笑い、手に汗を握るようなアクション描写に熱狂し、時には物語に涙することもありました。

私もそんな作品を描けるようなライトノベル作家になりたい。頭の中の空想を物語に変えて、一人でも多くの読者に届けることが目標です！

将来の夢

- 一作でも多くの作品を制作し、それを発表する
- デビューを果たす

目標・できるようになりたいこと

- 読者に刺激と満足を与えられるようなテキストを作成する
- 次のページを捲るのを楽しんでもらえるような世界観を作る

目次

- P05……現在制作中「日常歪曲エゴシエータ」
- P09……長編作品「鮮血の消防師団」
(R4年度校内コンクール **佳作**)
- P13……長編作品「闇金魔女のせいで魂を人形に
封印されて」
- P17……長編作品「最終防衛前線カゴシマ」
- P21……長編作品「黒鋼トウカは剣とかして王を斬る」
- P25……長編作品「妖怪対峙は鋼のごとく」
(R3年度校内コンクール **佳作**)



日常歪曲

エゴシエーター

歪んでゆく日常に立ち向かう少年の物語

主人公、神室夕星は退屈な「日常」を過ごしてきた。だが、彼の日常は何処か歪でもあった。

月に一度、謎の巨大ロボット〈エクステンド〉と正体不明の怪獣が戦いを繰り返しているのだから——

こちらは現在、私が執筆している完全新作になります。

「歪んでいく日常」をコンセプトに、退屈な「日常」を捨てた夕星が、“怪獣”や“魔女”といった「非日常」的存在との死闘を繰り返していく混合ジャンルアクションとしての完成を目指し、鋭意製作中です。

本ポートフォリオでは、幼馴染の藤森陽真理こと「ヒバチ」を狙う怪獣が現れたことを皮切りに、〈エクステンド〉のパイロットとして戦うことを迫られるワンシーンを掲載しています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



幼馴染を守るために、少年は「非日常」を選択した

理解が追いついていないのは夕星も同じだ。ただ、それと同時に妙な納得感もあった。まるで、こうなることが予め決められた確定事項のような気がしてならないのだ。

そんなことを考えると同時に「エクステンド」の巨体が跪き、掌を夕星へと差し出した。

さらに頭部を覆う装甲が展開。大きく口を開くようにして、その内側を露わとする。

「まさか、お前……」

そこに在ったのはちょうど人が一人収まりそうなシートと、一対の操縦桿だ。

空の操縦席を曝け出した「エクステンド」はただ鎮座して、己が主を静かに待ち望む。

「俺に『乗れ』って言いたいのか？」

上等だ。

「あの怪獣を倒せるだけの力が欲しい」と願い、その願いが通じた結果が、このチャンスだというのなら、躊躇う理由もなかった。

「待て、夕星！」

歩み出そうとする夕星の腕を、十悟が掴む。

「「エクステンド」はさっき負けたばかりじゃないか！ それに陽真里ちゃんだって馬鹿じゃない。仮に学校に残っていたとしても、あの怪獣が来ることを知ればすぐに避難するはずだろ！」

例え、困惑の中であろうとも、十悟の主張は最後まで正論であった。

夕星の周りの「頭のいい奴」は揃いも揃って、正論を振りかざす。それはきつと自分以上に周りが見えているからなの

だろう。

だが、今回ばかりは夕星も譲る気がなかった。

陽真里を狙う怪獣はこれまでの怪獣と何もかもが違っているのだ。

だから、どんな脅威が彼女に降りかかったとしても、おかしくはない。

「悪い十悟。俺はアイツが……陽真里が傷付く可能性があるのなら、例えそれが一パーセントに満たない確率であろうとも、それを許容することができないんだ」

その腕を払い除け夕星は続ける。

「俺にとって陽真里はただの幼馴染じゃねえんだ。増して、『好き』とか『嫌い』とか、そんなチープな言葉で表せるほど、俺の内心は安くねえんだよ」

Blood Fire Force
消防表紙

鮮血の 消防師団

茶園幸俊 illust 原口美瑛

R4年度校内コンクール 佳作

焔に包まれた少年の救命譚

青い炎を操る妖魔に憑かれてしまった主人公、明松周哉はその身に余る力で家族を燃やしてしまった。そんな絶望の際へと追い詰められた彼のもとに人工吸血鬼を名乗る特務消防師団の団長、不知火鈴華が現れ一つの交渉を持ち掛ける。

「その力を正しくコントロールする方法が知りたくはないか？」と――

こちらは勢いのある展開を評価していただき、R4年度に開催された校内コンクールでも好成績を残すことが出来ました。

本ポートフォリオではプロローグより、メインヒロインの不知火鈴華との出会いを切り抜いて掲載しています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作の全編を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



轟々と蒼炎が燃え上がる

「周哉くん。君を燃やした炎の色は何色だったか覚えてるかな？」

炎の色。そう問われて多くの人が想起するのは赤や橙色といった、暖かみのある色彩であろう。

だが、周哉の家族を包んだ炎の色は違っていた。

「あの炎は……寒々しく思えるほどに、蒼かった」

不明瞭だった周哉の記憶は、先ほどよりもハッキリと像を結んでゆく。

あのとき蒼い色をした火柱は唐突に燃え上がったのだ。それはすぐ傍にいた自分と真奈を呑み込んで。そのまま、うねるように両親へと襲い掛かった。

いや……それは違う。
事実はそうじゃなかった。

「……身体が熱いッ！……息が苦し

いッ！」

あの炎は他の何処からでもない、周哉の内側から噴き出たものであった。

「やっぱりだ」

鈴華が飛び退くが早いか、周哉の身体は今再び「蒼」に燃え上がる。

火傷の跡から止めどなく噴出した焰はカーテンへと燃え移り、瞬く間に病室を包んでみせた。

体内の酸素が欠乏しているのが自分でも分かる。焼かれた身が炭化しているのも、膚で痛感してしまう。

「自らさえ焼き焦がすほどの火力か。相も変わらず凄まじいね」

室内の防火設備が作動するも、炎の勢いは一向に収まらない。

それどころか、上がり切った熱量は備え付けのスプリンクラーを融解させてみせ

「はあ……どうやら、また忘れてしまったらしいね。私がさっきなんて自己紹介をしたのか」

鈴華が右手を払えば、何かが散る。それは蒼い炎とは真逆。「紅い」水滴であつた。

その水滴の正体が彼女の指先を伝う鮮血であると気づくまでに、そう時間はかからない。

「私の血は便利なものでね」

蒼炎の勢いは一滴に触れた途端、嘘のように弱まってゆく。

「ぐッ……！」

彼女はいまだ燃え続ける周哉の左腕(火元)を掴み上げ、その場に引きずり倒してみせた。

「私は『第十四特務消防師団』団長・不知火鈴華だ。今度こそ覚えてくれたまえッ！」



闇金魔女のせいぞろい

人形に魂を封印されて

【悲報】 幼馴染の魔女に借金をしたら、とんでもないことになったんだが！

魔導人形の生産が盛んな国パグリス。そんなパグリスで暮らす青年、スパナ・ヘッドバーンは英雄の間に生まれながらも、墮落し、借金取りに追われるという、なんとも惨めで恥知らずの毎日を過ごしていた。

そんなスパナを追いかける借金取りの魔女、ネジ・アルナートは彼とは少なからず因縁を持った幼馴染である

こちらは私が初めて挑戦したファンタジー作品であり、どうしようもないクズ野郎ことスパナが、様々な危険な仕事をこなし、借金を返していく更生譚になっています。

本ポートフォリオでは、そんなスパナがネジに詰められるコミカルなシーンを切り抜いています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作の全編を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



スパナを追い詰めるは闇金の幼馴染み

「さあ、さっさと返して貰おうじゃない。

私の会社から借りた分、この場で！」

ネジが胸ぐらを掴んで凄んできた。相変わらず暴力的な幼馴染である。

パグリスは表向きの治安こそ良く、物珍しさから街で働く魔導人形たちを見にくる観光客も多い国だ。

しかしながら、国が賭博や一部の麻薬を公認している裏の面を併せ持つ。

だから俺のような英雄の息子でも債務者に落ちぶれるし、夜の街はチンピラにギャングから盗賊までもが闊歩する伏魔殿と化す。

そんな国で金融会社を経営すれば、さぞ儲かることだろう。賭博も薬も金が絡むからな。

現にネジの羽織っているローブには最高級の素材である竜皮が充てられていた。

小級学校で一緒だった頃のネジは、泣き虫でいつも俺の後ろを着いてくるチビだったのに、今じゃその影もない。

「いやあ……いま手持ちがなくなっさ

……」

「あら？ さっきは物乞いの少女にお金を恵んでたくせに」

この野郎、さっきのやりとりを見てやがったな。

「忘れる。気の迷いだ」

「そういうところは昔から変わらないんだから。けど、カジノから出てくるアンタを見たって話も聞いている。ウチに借金があるってのに……それは一体どういうことかしらねえ？」

うっ……相変わらず痛いところを突いてくるぜ。

一年前。ネジが金融業も始めたと聞い

聞いた時、俺は驚くよりも先にラッキーだと思もった。臆病なネジなら、軽く脅すだけで借金を踏み倒せると考えたのだ。けど、蓋を開けてみれば、そこには俺以上に立派な悪人へと成長したネジがいた。暴力的でガサツ。しかも多くの攻撃魔法を会得した魔女ときたものだ。

「何よ、その顔。また何か考えごと？」

「別に」

「なら、さっさとお金を返しなさい」

「慈悲は？」

「とっくに失せたわ。十三回も転がされただんだから、私も舐められたもんね」

「アンタが一年間逃げ回るせいで金利は膨れ上がっているわ。今日こそ貸した金を返して貰うわよ！」

「あはは……そんなに逃げてたっけ？」
纏まった額を用意できない俺はネジを前にすると命からがら、全力で逃走を繰り返している。

闇金を経営する魔女になんて捕まれば、

何をされるかもわかったもんじゃやない。痛いのは嫌だし、漁船にも乗りたくない。地下に行くのも嫌なら、危険な魔法の実験台にもされたくない。

「さあ、早く！ これまでは上手い具合に逃げられてきたけど、今日という今日はキツチリ返して貰うからね」

「わっ、分かったよ。手間をかけて悪かった」

口ではそう言ってみたが、さて……どうしたものか。

最終防衛ライン
カゴシマ



蔓延する吸血鬼症

それに立ち向かうは人型兵器！？

人を異形のバケモノへと変貌させる病「吸血鬼症」の蔓延によって、日本に残された領土は鹿児島のみとなった。

主人公、島津鋼太郎は対吸血鬼のために開発されたヒト型装兵器〈FG〉のパイロットだ。そんな彼が出会ったのは地元をこよなく愛する少女・天璋院茜。性格も考え方も正反対の二人は、吸血鬼から日本を取り戻せるのか！？——

こちらは鹿児島を舞台に吸血鬼 v s メカの戦いを描いたアクション作品でありながら、茜を筆頭とする強烈な個性を秘めたヒロインたちに鋼太郎が翻弄されていくコミカルな作品でもあります。

そして、本ポートフォリオには可愛いだけでなく「狂犬」とまで称される茜の天才的な〈FG〉の戦闘シーンを切り抜いて、掲載しています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作の全編を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



その少女、狂犬似つき

「パルスレーダーとサーモグラフィックカメラを併用。探索範囲を広域モードに拡張」

〈ハツキ〉の収集する膨大な情報量がモニター上に叩き出された。それを元に紅音はざっくりとした戦況を俯瞰する。

下級吸血鬼が三十体以上に対して、抗戦する行動予備隊の〈FG〉は八機。

病原菌を内包した生物は皆等しく不幸と理不尽を運ぶ。〈吸血鬼症〉の罹患者であれば、一体を取り逃がしただけでもそこから人喰いの化け物が次々と増えていく。

「ふむ……なるほどね」

吸血鬼を山脈の一点に抑え込もうとする味方の配置と、まだらに点在する二十以上の×マーク。それは継戦が不可能になった、或いは大破した〈FG〉を示す。

ものだ。

辺りは廃油をぶちまけたような黒々しい闇に包まれていた。傾斜と凹凸が激しく、木々が密集とした山中は〈FG〉にとって最適の戦場とは言い難い。アスファルトに比べ脆すぎる地面は確実に足元を取りにくる。

「お世辞にも善戦してるとは言えないな。けど、」

そんな状況下でも、吸血鬼を市域に逃すまいと抗い続けた出水市の行動予備隊は十分に健闘したと言えた。

紅音は静かに操縦桿の握り心地を確認する。次いでキックペダルの跳ね返りや、スラスターの微細な角度を。そのまま、モニター上で孤立している吸血鬼の一体に狙い定めた。

「あとは私に任せてよ」

〈ハツキ〉が戦線へと躍り出た。

半円の弧を描きながらに飛来する〈ハツキ〉は、吸血鬼が空中に逃げることを許さない。関節同士の掠れ合う異音に振り返った吸血鬼の頭部を、その脚裏で踏みにじってみせた。

腐った果実を踏み潰してしまったかのような、不愉快な感触。その場から足を引き抜けば、赤黒い血肉が装甲べつたりとこびり付く。

「まずは一体」

それでも紅音は表情の一つさえ変えない。両腰に備えられた二丁のハンドガンを引き抜き、〈ハツキ〉は素早くそれを構えた。

まだハンドガンには銃弾が込められていない。代わりに、紅音は闇に広がった虚空へと狙いを定め、立て続けにトリガーを引いた。

当然ながら宙を舞うのは空砲である。全くの無意味。ただ二丁の銃声が、

遠吠えのように木々の隙間を反響するだけに思われた。

「ワオーン！ ……なんちゃって」

だが、それも違う。吠える銃声に周囲の吸血鬼が反応したのだ。

紅音は自らの五感と機体のセンサーが観測した情報を頼りに、接敵のタイミングを押し測る。

「ざっと、二〇秒かな？」

ハンドガンに弾倉を挿し込み、乾いた唇を舌尖でそつとなぞる。そうすれば、ついさっきの自分がやったように木々の隙間の闇から吸血鬼たちが飛び出してきた。

「ふふん♪ 狙い通り」

黒鋼卜力は

剣と化して

『王』を斬る!!!



幼馴染のトウカさんが**日本刀**に大変身！？

その身を武器に転ずる〈武器師〉とそれを用いて異形たちを打つ〈封印師〉両者は二人一組でこそ、真の力を発揮する。

〈封印師〉の見習いである時雨沢シンヤは、幼馴染で自らの相棒でもある〈武器師〉黒鋼トウカとの関係に悩んでいた。性格は真逆、コンビネーションも最悪。それでも二人は奥義たる〈人器一体〉を完成させなければ、ならないのだから——

こちらは幼馴染との関係や自らの実力不足に悩むシンヤを主人公に、様々な困難や強敵との戦いを乗り越えていくローファンタジー作品になります

本ポートフォリオでは、そんな本作のプロローグの冒頭を掲載しています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作の全編を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



欠伸を噛み締めるのは、魂の観測者

五限目。——本日は晴天。窓からは程よい日が入り込むなか、実施される科目は日本史だ。

担当の教師は黒板と向き合うだけで、ほとんど振り返ることをしない。板書の音と、教師の淡々と変わらないトーンは生徒たちを微睡みに誘っていた。

教室の半分はコクコクと頭を揺らす舟漕ぎ状態。一部の生徒に至っては堂々と机の上でスマホを弄り始める始末だ。

「……」

教室には「退屈」という思念から生まれる暇魂で溢れているが、それが見える人間もほとんどいない。

高校二年生の一学期。何処にでもある光景と言ってしまうえばそれまでだ。授業を聞いているのなんて、バカ真面目な生徒くらい。

良くも悪くも、そういう人間はこの先苦勞するのだろう、と時雨沢シンヤは、隣の席に座る少女のことを鼻で笑う。

「フツ……」

授業の内容だって、シンヤにとっては何百、何千回と教え込まれてきた内容だ。「えー、皆さんがご存知の通り。人と異形との戦いは今でも続いているのですが、異形の長である〈八災王〉がこの地に封印されたのを皮切りに、凶悪な異形達の発生も徐々に沈静化していった」

教科書にはまったく同じ一文があった。その脇に添付された古い資料画像には〈八災王〉の姿もある。数多の異形を引き連れた、巨大な蛇のバケモノだ。

「……まったく、知ってるっの」シンヤは誰にも聞こえないようにボヤいたつもりだった。

が、隣の少女には聞こえていたらしい。赤色をした鋭い眼孔に睨まれる。咄嗟に肩をすくめてとぼけてみたが、彼女には数十秒近く視線を外してはくれないかった。「そして、現在でも異形達と戦う役職を請け負うのが、〈武器師〉と〈封印師〉です。ここは、テストでも間違いやすいから気をつけるように」

教師はそれぞれの用語を強調するも、誰も熱心に聞いていない様子だ。

(……だから。知ってるっての)

隣の少女に睨まれた反省を生かして、今度は胸の内で吐き捨てることにした。

ただ、〈武器師〉と〈封印師〉が間違えられたり、混同されたりするのもよくあることで。語感が似ているというのもあるが、両職の具体的な役割が世間一般に知らされていないからだろう。

シンヤは既に授業の内容を熟知している。少なくとも、残る時間で真面目に授業を受けるのがバカらしくなる程度には

〈武器師〉と〈封印師〉について理解しているつもりだ。

(普段は人の形こそしているが、魂の憑代を武器に移し変えた人間が〈武器師〉。それを駆使して異形を封印するのが〈封印師〉だろ?)

もう欠伸を噛み殺す気も失せてきた。

(まんまじゃねーか)



妖怪退治は
鋼の如く

R3年度校内コンクール 佳作

『妖怪VSヒト型兵器』 疾走感あふれるメタルアクション！

妖怪と人間が混在する2030年の日本。妖怪対策局・祓刃の一員となった克堂鋼一郎は、ヒト型装甲兵器「凱機」を用いて、人に仇なす存在である妖怪を全滅寸前まで追いつめていた。そんな鋼一郎の前に現れたのは、謎多き少女、幸村白江。

そして彼女との出会いを境に鋼太郎は、人妖の生存を巡る乱戦に巻き込まれることになり――

こちらは去年の校内コンクールで好成績を収めた作品で、派手なアクションシーンとキャラクター達を評価してもらえました。

本ポートフォリオでは、そんな鋼一郎と白江の出会いの一場面を切り抜いて掲載しています。

また下記QRコードより、ネット公開された本作の全編を読むことも出来ますので是非、ご利用ください。



墓参り。出会ったのは怪奇な少女

「——今日までの殲滅作戦では、大蛇、蝦蟇、海坊主などの高危険度妖怪たちの駆除にも成功しました。近い将来。妖怪による殺人や傷害、放火に強盗。そうした妖怪被害が祓刃によって根絶される日もそう遠くないのかもしれませんが」
そこまでの報告を終え、鋼一郎はメモ帳を閉じる。

「最後に、あの夜の妖怪の件ですが、腕の本体は未だに駆除どころか、正体さえ掴めず」

明らかに口調が重苦しものへと変わった。それでも鋼一郎は絞り出すように言葉が続ける。

「……ですが、奴は必ず俺が」

なるべく平静を保とうとした。しかし、鋼一郎の感情は鋭い犬歯とともに剥き出しになる。

目を閉じれば、いつだって思い出せた。妖怪の死骸をいきなり突き破って現れたあの腕も。金属がつんざかれる音に、オイルと血が混ざり合ったむせ返る臭いも。「貴方の仇は必ず、この俺がッ！」
そう吠えて、立ち上がろうとした時だ。ぴしゃり！ と顔面に冷水を浴びせられる。

「冷たっ！ な、なんだよ!？」

振り返れば、後ろでは花束と柄杓を握りしめた少女がムスツとした顔でこちらを睨んでいた。

日傘の柄を細い首と小さな肩で器用に挟み込んだ彼女の足元には、水の入ったバケツもある。どうやら水をぶかけてくれたのは彼女で間違えないらしい。

「何してくれんだよ……」

「ここは故人が静かに眠るための場所。」

じゃ。なのに、バカみたいな大声で怒鳴りおって。どうやらお前さんは「まな——」
“ という言葉を知らぬようじゃの”

少女の言葉遣いはすこし……いや、かなり年寄り臭い。

こういうのは、なんと いえば良いのか。拗らせている？ 中二さん？ いや、仮にそうだとしても。初対面の人間に水を浴びせる理由がわからない。

「増して、それが自分にとって大切な者の墓前ともなれば尚のこと」

しかしながら、その指摘に反論できないのも事実だ。

「うっ……たしかにデカイ声を出したのは悪かったよ。……けど、見ず知らずの他人にいきなり水をかける奴がいるか？ うへえ、パンツまでびっしょりじゃねーか」

「そうかの？ 少なくとも、いきなり自身の下着事情をワシのような乙女にするあたり、お前さんの煩惱に火照った頭を

冷やしてやるべきじゃと思っただが、」

「いや、それはお前が水をぶかけてくれたからだろうがッ！」

十五か、十六歳くらいか。目の前の少女は口数を減らそうとしなかった。

「ぎゃー、ぎゃーと喚くな。それにワシはな、お前さんがいつまで経ってもそこを退いてくれないから、この身も焼け落ちてしまいそうな日差しの下。ずっと待っておったのじゃぞ。いくら呼んでも聞こえてないようじゃったし」

そう言われ鋼一郎は自分の腕に巻かれた時計を見る。どうやら本当に彼女にも気づかず、二十分近くもここに居座っていたらしい。挙げた線香もいつにまにか半分近くがすっかり白くなっていた。